

平成 30 年 7 月 20 日

「中野区新図書館及び地域開放型学校図書館等運営計画」学識経験者による  
検討委員会 第 2 回 議事テープ起こし

○開催概要

日時	平成 30 年 7 月 20 日（金） 15 時 00 分～18 時 00 分	
場所	中野区立中央図書館	
出席者	氏名	所属
	大串 夏身	昭和女子大学名誉教授
	宇陀 則彦	筑波大学 図書館情報メディア系
	平久江 祐司	筑波大学 図書館情報メディア系
	高橋 昭彦	中野区教育委員会事務局副参事（子ども教育経営担当）
	伊東 知秀	中野区地域支えあい推進室 中部すこやか福祉センター 副参事（地域ケア担当）
	宮崎 宏明	中野区教育委員会事務局 学校教育分野 指導室長
	小野 秀晃	中野区教育委員会事務局 子ども教育経営分野 図書館運用支援 担当係長
	加藤 慎一	株式会社ヴィアックス
	永田 治樹	株式会社未来の図書館研究所 株式会社ヴィアックス 顧問
	今泉 裕美子	株式会社ツクリエ
	太田 尚緒美	株式会社ツクリエ
	梶川 悦子	株式会社ヴィアックス
	牧野 雄二	株式会社未来の図書館研究所 株式会社ヴィアックス
	廣瀬 幸子	中野区立中央図書館
	佐伯 充久	株式会社ヴィアックス
笠原 未来	株式会社ヴィアックス	

○議事テープ起こし

発言者	内容
	1. はじめに (1) 開会 (2) 新委員の紹介
加藤	本日は暑い中お集まりいただき、ありがとうございます。私は業務委託で受託

	<p>させていただいております未来創造プロジェクト代表企業のヴィアックスの加藤と申します。どうぞ、よろしくお願いたします。今回、2回目という形になります。会議の中身に関しましては、こちらのお配りさせていただいておりますシナリオ通りに進めていきたいと考えております。</p> <p>まず、今回から新しくご参加いただきます、平久江祐司先生のご紹介をさせていただきたいと思っております。</p> <p>平久江先生は筑波大学 図書館情報メディア系教授でいらっしゃって、今回の検討支援業務の学識経験者として参加いただくことになりました。参考までに平久江先生のご経歴を紹介させていただきます。平久江先生は学校図書館の領域を専門とされています。『学習指導と学校図書館』などの著書の他、学校図書館に関わる多数の論文を執筆されています。文部科学省の「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」においては副座長を務められ、「子供の読書活動推進に関する有識者会議」の委員などをされていました。</p> <p>学校の学識経験者としてご参加いただく予定でした河西先生がご事情により参加できないことになりましたので、ご了承ください。</p> <p>それでは、座長の大串先生よろしくお願いたします。</p>
大串	<p>お手元にある資料の確認を行ないます。前回のテープ起こし、次第、「中野区立図書館における子育て支援事業に関する意向調査（アンケート）」、「地域開放型学校図書館検討課題」、「先行事例調査シート」、「ティーンズワークショップ「みんなでつくる 夢の図書館」まとめ」、それから私が作成しました「子育て支援サービスに関してのメモ」、企画提案書の子育て支援についての抜粋資料となります。</p> <p>まず、最初に事務局から事項報告をお願いいたします。</p>
<p>2. 議事</p> <p>2.1 報告事項</p> <p>(1) 調査の報告状況</p> <p>①調査の計画</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子育て支援</li> <li>・ 学校図書館</li> </ul>	
梶川	<p>代表いたしまして、梶川が報告させていただきます。</p> <p>それでは次第に沿いまして、子育て支援、学校図書館支援の調査状況の報告、調査の計画について報告いたします。</p> <p>資料に基づきまして現在の状況をご報告いたします。</p> <p>まず、子育て支援について。伊東副参事が所管されている、すこやか福祉センター等に伺い、ターゲット利用者層である子育て世代の住民に対して質問紙調査を行い、意向調査を実施する予定です。</p>

	学校図書館につきましては、司書教諭や学校図書館担当者の先生方にインタビュー調査を行い、学校図書館について把握する計画です。
②先行事例調査の状況報告	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子育て支援</li> <li>・学校支援</li> </ul>	
梶川	<p>先行事例調査の状況報告をいたします。</p> <p>子育て支援、学校支援につきまして5月29日に「えんぱーく」内にある塩尻市立図書館、5月30日に「アンフォーレ」内にある安城市図書情報館に行きまして資料の「先行事例調査（子育て支援、学校支援関連）状況報告」をご参照ください。</p> <p>手短かに内容についてご報告いたします。子育て支援については、子育て支援センターや子育て支援課が連携協力しております。図書館の2階部分に「子どもフロア」があり、0～3歳の子どもとその保護者が過ごす子育て支援拠点「ほっとスペース」が設けられていました。子育て支援課が担当している「ほっとスペース」では、子育てアドバイザーによる子育ての悩み相談対応、地域の子育て関連情報の提供、子育てに関する講習会等を行っています。</p> <p>それと連続する形で図書館の育児に関する本や雑誌、パンフレット等がテーマ別で配架されておりました。図書館単独で子育て支援を行っているのではなく、関係機関と連携協力して行っていることで、大変盛況で、多くのお子さん達が来館している様子が見受けられました。</p> <p>安城市図書情報館では図書館で読んだ本を記録できる「読書通帳」を、塩尻市図書館では、図書館や学校だけではなく家庭で読んだ本の記録や感想を書けるノート型の「読書手帳」を導入し、読書支援に力を入れている様子でした。これらは、一度読んだ本を忘れないだけでなく、読んだ時の記憶や感動を残すことができ、読書意欲の向上に繋がります。</p> <p>また、育児、児童向けにセミナー、講座等も開催しており、安城市では「ロボットプログラミング講座」を小さな子供向けにも行っていました。「えんぱーく」では著者、出版社、書店、図書館が連携した「子ども本の寺子屋」という講座を行っていました。</p> <p>学校支援につきましては、学校支援の人的サービスの部分とシステムの一体運用という2つのポイントがありました。学校司書派遣だけではなく、学校図書館アドバイザーや読書推進アドバイザーといった学校図書館担当者が存在しており、継続的に学校を訪問し、校長先生あるいは担当の先生方とコミュニケーションを語り、ニーズを把握した上で学校司書の研修を開催し、日常的な相談に乗っていました。公共図書館と学校図書館を繋ぐ人的なサービスが存在しており、公共図書館と学校図書館の連携が取れていることが見受けられました。</p>

	<p>また、公共図書館と学校図書館のシステムの一体運用が成されており、公共図書館の本を学校の先生や生徒に貸し出す定期配送サービスが行なわれておりました。学校への団体貸出用資料も予算を別にとり、しっかり確保されておりました。安城市の場合は、こうした取組みが行なわれて2年目に利用が2倍以上に向上した効果があったと伺いました。</p>
<p>③ティーンズワークショップの状況報告</p>	
<p>梶川</p>	<p>お手元にあります、「ティーンズワークショップ「みんなで作る 夢の図書館」まとめ」をご覧ください。こちらは中野区立図書館の職場体験に参加した中野区立中学校の2年生（16名）を対象にワークショップを開催しました。中野の新図書館のティーンズルーム、地域開放型学校図書館につきまして、新たなアイデアを生み出すブレインストーミングを行い、KJ法を用いて整理しました。まず始めに、公共図書館の利用状況を調査しました。「利用する」という回答では、「近いのでいつでも寄ることができる」との意見が多くありました。その他には「静かなので宿題や勉強ができる」、それから公共図書館をうまく利用している中学生もおりまして「学校図書館にない本を取り寄せる」といった取り寄せサービスも既に使っていました。そして「テスト前に資料や辞書を見て勉強する」ということで、テスト前に資料や辞書を参照して勉強している中学生もいました。</p> <p>また、公共図書館ではいろいろポップを付けて棚を作るのですが、「ポップを見て、他の人が勧めている本を読むのは楽しい」といった意見もありました。</p> <p>一方、公共図書館を利用しない中学生の意見では、「忙しいので図書館に行く時間がない」、「本を読む時間がない」ということでした。その他に「本は学校図書館で借りるので公共図書館に行かない」、「近くの図書館は絵本が多く読み応えのある資料がない」、「読みたい本は買っているので、公共図書館では借りない」といった、公共図書館を利用しない理由の中には「他の方法で読書をしている」という理由がありました。こちらについては、私の方でも想定外なことでありました。</p> <p>次に、新図書館のティーンズルームについて中学生に意見を聞きました。事前に新図書館のティーンズルームはグループで利用できる体験型、参加型の仕組みを持たせる、読書だけではなく、勉強をしたり友達と話したり、そこでの過ごし方はティーンズの皆さんが考えることができるスペースであることを説明しました。そこでは、「他の人の迷惑にならないように騒いでもよい場所、静かに過ごす場所を分けて、みんなが気持ちよく使えるようにした方がよいのではないか」という提案がありました。</p> <p>また、「勉強するために、もっと様々な資料が欲しい」、「コンセント、充電コード、Wi-Fi、音楽プレイヤー、DVD等」といった一通り、AVやICTの機器が使える</p>

るような環境を欲している意見もありました。それから「カフェやドリンクバー、あるいはコンビニがあって、そこで食事をしたい」、「ゲーム等をして知らない人と友達になれたらよいのではないか」という意見もありました。

まとめると、「ティーンズ世代の居場所機能の充実」と「自己実現の場・社会体験機会の場」を欲していることが分かりました。まず「ティーンズ世代の居場所機能の充実」では、「一人でも気軽に足を運べ、気兼ねなく過ごせる居場所」、「交流、くつろぎの場として仲間同士でくつろいで話ができて、飲食のできる場所」、そして、「学習の場所」ということで「友達と相談しながら勉強ができる」あるいは「個室にて自分で調べものができる場所」、そのための学習教材、参考図書の充実も求めています。もう一つの「自己実現の場・社会体験機会の場」としては、「自分が書いた小説を展示したい」、「自分で考えたゲームをみんなで作ってみたい、例えば、図書館脱出ゲームなど」、「AI搭載のロボットを育てて友達と共同作業をして成果を作っていきたい」という意見がありました。以上がティーンズルームに関して中学生から採集できたところでもあります。

次に、地域開放型学校図書館についてです。

こちらはティーンズ世代だけではなく、その地域に暮らす人々が対象であること、特に子育て中の保護者や小さな子ども、お年寄りのみなさんに対し、読書活動を通して支援する場所であると説明をした後に、どのような図書館になったらよいか意見を聞きました。ここでも「地域の人達と様々なゲームをしたい」、「囲碁や将棋等をして様々な年代の人達と触れ合いたい」、「快適なソファ、お年寄りにはマッサージチェアを用意して、みんなが居心地のよい空間で過ごせるようにしたらよいのではないか」といった心優しい中学生の意見もありました。他には「軽食やお菓子を食べることができ、自動販売機があったらよいのではないか」「Wi-Fi やコンセント一式が欲しい」という要望も多かったです。さらに「学校にない資料（雑誌、漫画、ラノベ）を置いて欲しい」等の意見が出ていました。

「世代を超えて地域コミュニティが気軽に足を運べ、気兼ねなく過ごせる安全な場所」、「高齢者、子ども、若者が交流して飲食もできて居心地のよい場所」、「みんながそこに集まって、地域の人のお遊び場になったらよい」というわけです。一方、学習の場としては「友達同士で読書や宿題をしたい。勉強を教えてくださいの人が居たらよい」という意見や、「成果物の発表の場（授業で制作した自分の調べ学習あるいは授業の成果物）として、学校の友達だけではなく地域の人達にもプレゼンテーションをしたい」と表現する中学生もいて驚きました。「自分で本を書いて見てもらいたい」など、自己の成果物のアウトプットの場を学校以外に求めていることが分かりました。趣味の活動についても「自分で没頭できる」、あるいは「共通の趣味を持つ仲間や、ゲーム等を通じて新たな友

	<p>達作りも期待している」との意見もありました。また、「ティーンズが事業の立案、企画に関わり、様々なイベントをしたい」といった、ティーンズルームの話しに出ていたことと同じような「ゲームを作成してイベントを行いたい」「大人も中高生も参加できるビブリオバトルをやりたい」といった意見が出てきました。中学生のみなさんとの話は楽しい時間でした。</p> <p>以上で調査の状況報告とさせていただきます。</p>
大串	<p>何か質問はございますか。非常に興味深い内容です。</p> <p>まず、最初にアンケート調査について。子育て支援については行政で中核的に担っている局があると思いますが、アンケートを取る場所や人に関しての摺合せは行ったのですか。うまく摺合せをして意見を取り入れる形にしてから実行しないと、様々な問題が発生する。今後、図書館側が子育て支援を行うので、注意して実行していただければと思います。行政的にはどうでしょうか。</p>
<p>2.2 検討事項</p> <p>(1) 子育て支援について</p> <p>①コンセプト</p> <p>②運営のポイント</p> <p>③フロアでのサービスについて</p>	
高橋	<p>行政としては、子育て世代が孤立するという問題がある中で、地域で集う場を確保して行くのは大きな課題であると思っています。中野区でも子育てひろばや地域のグループが自主的に活動して、支援を行っている。今回地域の中で開放型図書館をつくらうとしていて、身近なところに図書館という特色を持たせた中で、選択の幅の1つとして広げていけたなら、今までの区の施策に厚みを持たしていけるとと思っています。その時どういう特色を持たせるのか、ということ、ぜひ議論していただきたい。先行事例の中で特色があればご紹介いただきたい。先行事例の中でないとしても、「こういう所を伸ばしたら図書館、図書に親しむ」ということも含めて、プラスに働くのではないかと。特色があれば既存の区の施策も、そこに連携させればよいわけで、人の流れをそこに繋げて行けばよい。そういった新しい特色を持った地域の子育て世代がうまく来てくれるような、継続して利用してもらえるようにするにはどうしたらよいか、お知恵をいただければと思います。</p> <p>聞いていて思ったのですが、いわゆる図書館は静かというイメージですが、静かなイメージのまま場所を確保すればよいのか。発想を変えて、声や音を出せる区画を確保してもよいのではないかと。我々は固定概念で考えてしまうのですが、それを打ち破るような発想転換したアイデアもいただけると有り難い。そういった中で今後中野区としては、特色ある場所に仕立てていけるとよいと思っています。</p>

大串	<p>大串は昔から図書館は静かな場所ではなくて、賑やかにしていただきたいと思っています。世田谷区でつくった図書館は 700 平米の小さな図書館でしたが、子どものエリアはガラスで囲って外からも見えるようにしました。中ではお母さん達が子どもへ読み聞かせしたり、子ども達が遊んだり、様々なことができるようにして構わないことにした。それがとても好評でした。やはり子どもは騒ぐものです。図書館とは、本を静かに読むという側面もあり、読み聞かせをする側面もある。子ども達同士で読みあうとか、紙芝居を見合う等、様々なことで声が出る訳です。図書館は賑やかな空間になるのは当たり前であるし、子どもは本を壊すことは当たり前だと考えた方が僕はよいと思います。</p>
高橋	<p>中野区の地域開放型学校図書館の場合、学校図書館と区立図書館分館部分が併設されると考えられています。開放型の部分は今の発想で、必ずしも静音である必要はないのではないかと考えています。学校図書館自体はどうなのだろうかと思っています。やはり学校図書館は静かなままがよいのか、先ほどプレゼンというようなお話もありましたけども、学校図書館自体も新たな未来型の学校図書館を描いてもよいのではないかと考えています。お考えがありましたらお聞かせいただきたいと思います。</p>
大串	<p>文部省の議会に参加してまとめたものでは、学校図書館は学習センター、読書センター、情報センターという 3 つの機関に分かれている。学習センターでは共同学習を行うので、声が出るのは当たり前です。しかし、5 年生の道徳の教科書にて「ルールを守ろう」という話が載っていて、その内容に、子どもたちが調べ学習のテーマを持って、みんなで調べたものを図書館でまとめようとしていたら、大学生から「図書館で話してはいけない、静かにしろ。」と言われて、自分たちが調べたことがまとまらず残念であった。公共図書館は静かにしなければいけない、ということが記載されていた。その教科書を読んで困ってしまいました。公共図書館というのは大人もできる共同学習、みんなで本を仲立ちとして様々なことを語り合って新しいものを生み出すことをしていかなければならない。そういう時代が来ているのです。</p>
平久江	<p>まだ具体的なイメージというものはないのですが、学校図書館としては子育て支援ということは今まで結びつけて考えることはなかったようです。具体的には宇都宮だと幼稚園、小学校、中学校を 1 つの区で纏めていて定期的に連絡を取り合ったりとか、様々な交流をする場を作ったりして組織を作っていくような事例は聞いているのですが、子育て支援をいうのは一般的にどのようなことをイメージをしているのでしょうか。</p>
大串	<p>子育て支援を最初に取り組んだのは、愛媛県です。愛媛県は県立図書館に独立した部屋を造って、最初のネーミングは「読書を通じた子育て支援」というものだった。ネーミングの理由は、「子育て支援」といきなり出してしまうと必ず</p>

社会福祉の方から「うちが子育て支援をやっているのに、なぜ図書館が支援をやるのですか」と言われてしまうためです。あくまで本があって、読書を基本的に中心に置いたのが図書館である。だから「読書を通じた子育て支援」という形にしたら、福祉のほうから「一緒にやろう」と話になった。

例えば私が講師を務めている「JPIC（一般財団法人 出版文化産業振興財団）」で毎年読み聞かせの講習会をやっています。6, 7 年位前に茨城県教育委員会が「保育士を 70 人出すので、講習に入れてください。」と申し出がありました。全国規模で講習の定員が 100 人でしたので、茨城県については別に設定をして、茨城県に行き保育士の方々に読み聞かせの実習を含めた講習をやることにしました。茨城県立図書館は企業からお金を貰って、読み聞かせについて全県的にボランティアの養成をしています。

図書館はあくまでも本を仲立ちにして、読み聞かせをしながら、その周辺に様々な相談を受けたりしている。福祉と連携を持って進めている。医療に関しても同様で、図書館で医療・健康情報の支援もやっているのですが、図書館でやるのはあくまでも本が中心です。ところが本を紹介し、講習会や講座を開くと相談会ということで医者にも来ていただくことになる。医者から「図書館でやる相談会と医療機関でやる相談会とでは質問が違う」と言われる。医療機関の場合だと、「こういう状態」や「この部分」と相談されることが多いのですが、図書館で行くと「自分や家族の健康」というような幅の広い質問が多いとのこと。そういった点では地域の医療にとっても役に立っているようです。具体的には病気のことに関しては医療機関や保健所を案内して、そちらで相談していただいている。その場合は優先してご案内をしています。

例えば都立図書館では、都庁で開いている法律相談に優先的に受け入れてもらうということをやっていました。例として「父親が亡くなりお妻さんに父親の財産を全てとられてしまったので、どうしたらよいか」という相談も受けました。図書館では判例はあるけれども、具体例はないので、東京都の都庁でやっている法律相談の窓口があるので、そこに優先して相談できるように図書館から案内をしていました。子育て支援もそういった側面もあるのです。図書館とはあくまで本です。本を仲立ちにして様々な方に集まっていただくということです。それから「中野区立図書館における子育て支援事業に関する意向調査（アンケート）」の 11 番にあります、「中野区の子育て関連のサークルや施設の情報などを手に入れることができる」ということは日本の図書館ではあまりなく、アメリカの図書館では実際にあります。私が視察に行った図書館では入口近くにオープンスペースがあり、そこに様々な地域の子育てに関する、住民の活動の中で創られたリーフレット等が置いてあります。誰でも自由に置いてよいが、図書館が管理をして政治的なものは許可をしていませんでした。「図書館は自由



	<p>な場である」ということです。いま日本の図書館に行くと、行政のリーフレットが置かれている。むしろ住民の方々が自分達でおやりになることがあると、地域の中でも図書館に来ると様々なことで活動しているのが分かって、自分も参加できるという流れができてくる。こういったことが図書館の中で子育て支援をやる 1 つの大きな意味だと僕は思います。図書館員がコーディネーターとなって、紹介しあう。アメリカの図書館では、イベントに参加すると図書館員が友達を紹介してくれる。図書館に行くと友達が何人もできて地域の繋がりができるようになっている。仲立ちをして人が集まって地域の繋がりができて行く。他にも様々な繋がりがあがる。それが全体として子育て世代の繋がりになり重層的になるととてもよいと思います。それをぜひ実現していただきたく思っております。</p> <p>何かご意見はありますか。</p>
宇陀	資料についてお聞きます。聞きそびれているのかもしれませんが、アンケートはこれから行うものですか、それとも行ったものですか。
牧野	これから行うアンケートです。
宇陀	では、コメントいたします。まず、子育て事業における意向調査について、どの場でどのように配る予定ですか。
牧野	区内のすこやか福祉センターや子育て支援関連の施設に訪問、配布してご意見をいただく予定です。
宇陀	アンケート用紙を確認して思ったことは、問 3 には小さな字で沢山質問が記載されていますが、読めるのでしょうか。僕がこの場で読んでも、なかなか全部読んで内容を理解して、さらに必要度合いを区別するのは難しいです。1 つひとつの文が長い気がしますので、ここを見やすく工夫しないと、忙しいお子様連れの方には酷かな、という気がします。例えば問 3 の 1 番であったら「相談にのってくれる」というように短くしないと厳しいのではないのでしょうか。もう一点、「中野区立図書館における子育て支援事業に関する意向調査（アンケート）」の問 3 の 1 番から 15 番は何か流れがあるのですか。つまり構造化されているのかどうか気になっています。一見すると思いつきで並べているだけのように見えてしまう。答える側からすると、もう少しストーリーがあると答えやすいと思うのですが、バラバラに見えます。例えば「イベントについて聞いています」、「相談について聞いています」等カテゴリー化すると答えやすいかと思えます。
牧野	例えばサービス、イベントと分けて作成してはいるのですが、もう少し答えやすいよう工夫しての実施を検討します。
平久江	先ほどお話しにあった、子育て支援と学校図書館との関係についてですが、率直に言わせていただいてもよろしいでしょうか。むしろ止めた方がよいのでは

	<p>ないでしょうか。それぞれ役割とできる範囲があると思います。学校図書館と子育て支援というのは、あまりマッチングしないのでマイナスや弊害が出てくるのではないかという気がします。ただ、積極的に新しいコンセプトとして出していきたい、というのであれば知恵は出せます。ただ、そういう意向がない中で進めるのであれば、子育て支援は公共図書館との関係で行なっていくべきなので、学校図書館はそこには係わらない方がよいのではないのでしょうか。学校図書館はスペースにしろ、資料にしろ、力がないのです。かなり限られているため、なかなか子育て支援までできません。逆に学校図書館の機能を阻害していくようなことになるのでは、という感じがします。ただ、今の時点でもう少し状況を把握できたら、また違うようにできるかもしれないと思います。そのような所を率直にお聞きしたいです。</p>
高橋	<p>平久江先生の方で弊害やマイナスが具体的に想定されるようなことはイメージとしてあるのでしょうか。</p>
平久江	<p>限られたマンパワーを集約して使っていくべきではあり、学校図書館の立場にたって聞くと、うまくいかなくなってくると・・・。</p>
高橋	<p>マンパワーをしっかりと確保すれば、そこに可能性はありますか。</p>
平久江	<p>それは可能性としては否定できないですが、それぞれに適切な部署同士が結びついて相乗効果が出てきます。その道の道がきちんとでき上がった時点で、他にどのような機関がサポートできるのか、関係所管の役割を次の段階で考えて行く可能性はあると思います。</p>
大串	<p>次の先行事例についてはどうでしょうか。安城の方は、学校図書館の運営についても公共図書館が所管するようですが。</p>
梶川	<p>安城市ではなく、塩尻市の方です。所管が今まで教育センターでしたが、図書館に移管して公共図書館の司書を派遣する形で運営しているようです。安城の方は、教育委員会所管の学校職員であると仰っていました。</p>
平久江	<p>なぜここを調査対象としたのですか。</p>
梶川	<p>今回のポイントが、子育て支援と学校支援そしてデジタル工作機械を導入している図書館、複合施設ということでした。調査したところ、これらの図書館がそのポイントを満たしていたので対象としました。</p>
平久江	<p>地域開放型はアイデアとして必要なテーマを持っていると思います。そういった分野で進んでいる所を見てみるとよいと思います。例えば市川市に関しては、学習コミュニティを基本概念として、地域資料の環境を捉えているので、そういった視点も調べてみてはいかがでしょうか。</p>
宇陀	<p>中野区用に企画提案書があると思います。その企画提案書を照らし合わせて、安城と塩尻のポイントはありますか。企画書内で「こういったことがやりたい」といったことがある中で、「塩尻の取組みが企画書で合致します」ということはあ</p>

	りますか。中野区の企画提案書と比べてどうなのでしょう。
梶川	<p>中高生が過ごすティーンズルームに3Dプリンタを設置することが検討されています。デジタル工作機械を公共図書館で運用している事例を探していたところ、その中で安城と塩尻が適していると思いました。実際に住民の方々にどのようにデジタル工作機械を利用しているのかを調査しました。ティーンエイジャーの利用が多い塩尻市立図書館では、図書館単体ではなく施設全体の構造として中高生を取り込んでいることが分かりました。1つのポイントとしては、ティーンエイジャーがどのように図書館の機能を活用しているかという視点です。</p> <p>さらに子育て支援についてですが、図書館における子育て支援となると、どうしても資料の提供、読み聞かせとなり、図書館員が子育ての悩み相談に応じることや、遊ぶスペースの提供は難しいと思いました。安城市図書情報館では、他の機関と連携して、図書館の中にプレイルームがあり、他機関の専門家が常駐し悩み相談に応じ、地域の情報を提供しています。塩尻の場合は児童の貸出カウンターの横に子育て支援カウンターが連続する形であります。図書館のカードと子育てセンターのカウンターのカードが共通しています。そういったことが中野区の状況とどういう風に連動するか未知数ですが、中野区の新図書館にも子ども支援センターが入るということがあるので、そこで何らかのヒントになると思い伺ってきました。</p>
宇陀	中野区の企画書でやりたいことや似たことを、塩尻と安城市でやっているのか、あるいは何か行っていることが中野区でもうまく行くというものがあるのでチェックを付けたということでしょうか。
梶川	そうですね。あと、ビジネス支援でも成功している事例がなかなかない中、安城と塩尻は成功されていたので、それも視察対象になりました。
大串	<p>時間もあるので、もう少し先に行きましょう。</p> <p>ティーンズワークショップに関して、生徒さんにいくつか意見を聞いたようですが、何かご意見はありますか。</p>
宇陀	<p>中学生にどのように事前に説明をしたのでしょうか。説明によって回答が変わってくると思います。</p> <p>3つのテーマの中で、1つ目は「公共図書館の利用状況」とありますが、利用状況がテーマではないですね。公共図書館をどのように利用しているかを中学生に話してもらった、ということですね。</p> <p>16人中、「利用する」8人と「利用しない」8人できれいに分かれていて、各々に対して公共図書館どのように使っているかを聞いたのがテーマの中の1つということでしょうか。公共図書館は特定しているのですか。</p>
梶川	特定はしていなかったのですが、ワークショップで話している中で、自分の家に近い中野区立図書館ということになりました。

宇陀	利用しないと答えた 8 人にもティーンズルームや地域開放型学校図書館について聞いているのでしょうか。
梶川	はい。
宇陀	日頃利用している 8 人とそうではない 8 人の意見は図書館に対する意見が相当違うように思いますが、そこはあまり区別して聞いていないのでしょうか。また、図書館というものをどのように説明したのか気になっています。
梶川	今度のティーンズルームはでき上がったモノを皆さんが使っていくのではなくて、皆さんが育てていく場であると説明しました。今までのように、できた部屋で静かに勉強することや、あるいは友達と話をする形で使うのではなく、ここがスタートで新しい体験ができるように設備を整えて行きたいこと伝えました。その新しい体験ができる場で何をしたいか、何ができるかを問いかけたところ、「お年寄りはいろいろな所に行けないので、世界を旅行したようなバーチャル体験をしてもらいたい」といった意見がありました。ただ使うのではなく、アイデアを出してそれが実現できるような場所と説明をしております。
宇陀	中学生は何か共通するものをイメージしているのではなく、それぞれがティーンズルームについて思うことを自由に答えてもらった、ということでしょうか。
梶川	はい。そうです。
宇陀	ティーンズルームの方は中学生も「自分たちのスペースだ」とイメージが湧くと思うのですが、地域開放型学校図書館においては概念があるようで難しいと思うのですが、そこはどのように説明したのですか。
梶川	短い時間でしたので、どの程度まで受け止めてもらったか分からないのですが、「公共サービスの場であり、小さいお子様やお父さん、お母さん、みんなのような中学生、小学生またお年寄りの人たちがその空間で安心して過ごせて読書や交流ができる場所を想定している」と説明しました。
宇陀	日頃使っている学校図書館に地域の人々が来るイメージは持っていたいたのですか。
梶川	説明上では、学校図書館と併設した公共図書館であると説明しました。時間、条件によって両方使用することができますが、学校図書館に併設された公共図書館として説明をしました。
宇陀	人数が少ないのでどこまで取り入れるのかは分かりませんが、意見がとても多いです。「快適なソファやマッサージチェアを用意して、子どももお年寄りにも居心地のよい空間をつくる」という回答を 9 人も答えています。これは何かあるのでしょうか。
梶川	答えが同じような傾向のものはまとめてしまったので、厳密に言えば少し違います。「快適なソファ」とは居心地のよい席や子どもたちも座れる小さな椅子があったらよいのではないかと、それぞれの年代に合った居心地のよい空間が欲

	しいということでもとめてしまいました。
宇陀	新しいタイプの図書館に対して中学生は割とポジティブに受け入れたという理解でよろしいでしょうか。
梶川	引いている生徒はいなくて、「そういうこともできるのか」と思ってくれる生徒が多かったです。「1人で過ごしたいけれども、新しい友達もつくりたい」という意見や、「みんなに自分のことを知ってもらいたい」という生徒もいてアウトプットする場が欲しいのではと感じました。
宇陀	ティーンズルームについては「こんなことがやりたい」と意見が出やすいかと予想されますが、地域開放型の新しい概念に対して中学生がポジティブに捉えているのは面白いのではないのでしょうか。
梶川	基本的に図書館を好きな生徒が多かったのかと思います。
宇陀	図書館好きの中学生という前提があるのですか。
梶川	いえ、そのようなことはありません。中学生同士の会話から「図書館は本を読んで、大人しく勉強をする場だけではない」という気づきはあったようです。
宇陀	全くネガティブな意見がないですね。
平久江	否定的な意見がないことについて、子どもはあまり否定的な意見を言わないので、このような結果になることはあると思います。 ただ、地域開放型図書館においては横浜市、札幌市でも運営されていて、そこでは様々な課題があるのですが、そういった所の事例も見た方がよい気がします。東京のような公共図書館サービスが行き届いた地域での地域開放型図書館に求められる機能と、地方で行なっている地域開放型図書館で求められる機能とは違いがあるのではないのでしょうか。新しい中野区ならではのモノを打ち出すとしたら、その違いを見極めた上で行なっていくと新しいモノは生まれて来ません。ここでの調査においては対象地を考えた方が良かったかもしれないです。
梶川	地域開放型の先行事例調査については、千代田区の昌平まちかど図書館、渋谷区臨川みんなの図書館、立川市柴崎図書館などについて調査します。
平久江	その調査に期待をします。
梶川	地域開放型図書館を調べますと、今回の中野区のように学校図書館に併設されるタイプと学校図書館そのものを開放して住民を入れるタイプ、それから昌平まちかど図書館のように、公共図書館側に学校図書館があって、そこを開放しているタイプといくつかありました。中野区のように学校図書館に公共図書館をくっつけているような事例は、首都圏ではなかなか見つかりませんでした。ここは見ておいた方がよいという事例がありましたら教えていただけると幸いです。

<p>2.2 検討事項</p> <p>(2) 学校図書館の運営について</p> <p>①中野区の学校図書館の整備充実について</p> <p>(3) 地域開放型学校図書館運営について</p> <p>①検討課題について</p>	
大串	<p>検討課題について、1つは子育て支援について意見を求められています。2つ目には学校図書館の運営について意見を求められています。</p> <p>中野区の学校図書館の整備充実について、お手元に資料「地域開放型学校図書館検討課題」があります。こちらについて考えていきたいと思えます。</p>
梶川	<p>まず中野区の目指す図書館像の中に主な取組みとして、①蔵書構成の充実と各館の個性づくり、②「どこでも図書館の推進」、③図書館サービスの向上、④地域図書館の整備、⑤地域開放型学校図書館の整備があります。</p> <p>地域開放型学校図書館については、中野区の読書活動推進計画の中で地域における親子読書活動を推進し、読書活動を通じた子ども・親子・ボランティア交流の地域拠点づくりや、放課後・学校休業日における子ども・親子の読書活動を通じた居場所づくりを進めるため、この整備を行うと提示されております。</p> <p>そこで、地域開放型学校図書館の考え方と致しまして、地域と学校が連携・協働し、図書館活動を中核とした子どもや地域コミュニティを支える「学び」の場とすることが考えられます。その中で基本的な要件としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の親子の読書支援を推進する。</li> <li>・読書支援として本の貸出にとどまらず、学ぶ要求を刺激するイベントやセミナーを開催し、生涯学習支援の機能を持つ。</li> <li>・公共図書館と学校図書館連携（地域開放型学校図書館を含む）に基づき、蔵書の共有と相互貸借の実現が図られ、適切な資料の発見による読書推進や調査支援が拡充する。また、システムによる一元管理をすることで、選書から装備、配送、蔵書の管理にいたるまで効率的に行うことができ、財源の有効活用を図ることができる。</li> <li>・保護者の協力やボランティアの育成を通し、学校図書館を核とした「コミュニティ・スクール」を志向する。</li> </ul> <p>「コミュニティ・スクール」という言葉を出しましたが、今後検討する必要があります。親子の読書活動を推進すると同時に、読書活動を通じた地域の拠点づくりになるとよいのではないかと考えております。</p> <p>アプローチとしては、先行事例調査や学校関係者からお話を伺い、住民の方からの意見を聴取し、学校の先生方からご意見をいただいて計画を作成する形で進んでおります。</p> <p>検討すべき事項としては、5つあります。1つ目は蔵書についてです。地域開放</p>

	<p>型学校図書館を創る際には、資料収集方針をしっかりと設定しなければいけないと思っております。地域開放型学校図書館の主な利用者は、乳幼児と保護者、小学生と保護者、高齢者の方々になるのではないかと思います。</p> <p>そして、そこには絵本、児童書、漫画、健康・医療情報などを収集していこうと考えておりますが、特に児童書は学校図書館の蔵書を補完する形で揃えた方がよいのか、あるいは重ならないように学校図書館では足りていない資料を揃えた方がよいのかと検討しています。問題集、参考書においては、通常公共図書館では揃えないことになってはいますが、生涯にわたる学びという視点で良質な問題集や参考書を揃え勉強ができるようにすることも検討しております。</p> <p>デジタル資料は今の子ども達にとって必須であるため、予算の関係もあり難しいことではありますが、デジタル資料の導入も検討できたらよいと思っております。雑誌については、子育て、教育、医療関連を中心に収集していきませんが、ここに関してもタブレットPCを置き、電子雑誌等も展開できると新しい方向性が出るのではないかと思います。新聞は原則購読せずにタブレットPCによるネットニュースで対応することも考えられます。しかし公共図書館では高齢者の方が新聞を広げて、憩いの場として過ごしている光景をよく見ます。そういった方々にタブレットPCでネットニュース、情報を見ていただくためには、デジタルリテラシーの支援を行う必要があると思っております。私はタブレットPC講習会を公共図書館で行なっていますが、80代くらいのお年寄りの方も熱心にご自身でタブレットPCを使って情報を取得されている方も多いので、この辺りは導入してもよいのではないかと考えております。</p> <p>それから、システムを一元化して運用することが考えられますが、その将来的なところで開放型図書館の屋外に24時間稼働の自動貸出機（ロッカー）を導入し、予約本が受け取れるようにするなど、ICTを活用しサービスを導入し、人的資源の効率化にも繋がればと考えています。</p> <p>次に、設えの問題として地域開放型学校図書館は読書や学びのスペースではありますが、地域の人々の交流のスペースであることも検討しています。ラーニングコモンズのように情報通信環境を備えて自習やグループ学習もできるような設えにしたいのですが、スペースも小さいので、どの程度考えていたらよろしいのか、また飲食はどこまで可能とするか。地域社会に開かれた学校の実現ということで、現状、学校図書館を地域に開放するということにはかなり高いハードルがあると思っております。また、安全対策の留意点も検討すべき事項として挙げております。</p>
大串	<p>今のご説明で、こういったイメージをしているのか、依然としてみえない点もあります。例えば閲覧席を確保して蔵書は5,000冊程度とすると書いてあるのですが、学校図書館の一部をエリアとして限って「ここは開放の場所ですよ」</p>

	とすのでしょうか。
梶川	新しく建てる学校図書館においては、カウンター越しに別の部屋として設置できるのですが、改築しない学校図書館については、現在の図書室内に 5,000 冊程度の資料を揃えるといった 2 つのパターンが存在するような形になります。
高橋	<p>建て替えて、2 つ確保するイメージを作って、そうではない既存校の利用については可能な限りという発想で考えていただければよいと思います。</p> <p>5,000 冊というのは、当初想定ではありますが、限られたスペースの中でどう特色づけをして、来館をしてもらえ地域開放型学校図書館にできるのかを話し合っていたきたいです。その特色づけの 1 つとして、先ほどの子育て支援を行政としては着目してはどうだろうかと考えています。</p> <p>選択肢としては全年齢対応型とありますが、限られたスペースの中で全てのニーズに応えることは難しい。これからも読書に親しむ層を厚くすることを考え、地域コミュニティの将来性を考えた場合には、子育て世代に重点を置いたらどうなのかと 1 つの仮説とし、イメージをしています。</p> <p>名前に関しても「地域開放型学校図書館」と言われても誰が関心を持ち、足を運ぶかという、運ばないと思う。そこで特色づけができればネーミングも自ずと発想が絞り込まれて、より魅力的な名前もできるでしょうし、地域の関心が高まれば「こういう風にして欲しい」と声も聞こえてくるのではないかと思います。この件に関してははっきり「ここまで」といった打ち出しができていない状況ですが、今お話ししたようなイメージを持っています。</p> <p>この件は完全にフォーカスして議論してもら必要はありません。行政としてはそう捉えています、「そうではない。次の時代を考えたらこっちの方がよい」という話があっても当然だと思います。先ほど、子育て支援は難しいのではないかというお話しも含めて、あまり前提を語りすぎずにお話しいただければと思っています。</p>
宇陀	これで決まりということではなくて、標準配置イメージということですか。
高橋	スペース的には学校の中に造る話なので、普通教室があり特別教室もあり、様々な要素がある中で全体の使用可能スペースは確定としている。内部教室は 2.5 くらいを想定している中で実現をします。
平久江	<p>今発表していただいたコンセプトに関しては、しっかりとしたコンセプトで、よく図書館について考えられて作られていることが読んでいて伝わってきます。ただ、問題はそれをどう現実に落とし込むか、という話しになります。</p> <p>今、学校図書館では、学習指導要領が改訂されて大きく 2 つの課題が発生しています。1 つはアクティブラーニングにどう対応しているのか、という点です。それからもう 1 つは地域の諸機関とどう連携しているのか、この 2 つが学校図書館の課題となります。そういう意味ではここにあるキーワードとしては、ア</p>



	<p>クティブラーニングへの対応として、課題解決支援型というのとはとても面白いワードとして使えると思います。一方、地域との連携を考えていったときには地域開放型学校図書館という考え方も非常に説得力のあるキーワードとして使えると思います。多分、予算獲得があるから何かしら新しい物を建てないと、難しい側面があると思います。そういう意味では戦略的にもよいかと思うのですが、子どもたちがよりよい学びができるような学校図書館をつくっていかないと、これから何十年後もそういった所で学ぶ子どもが出てきますので、きちんと学校図書館の在り様を考えていかななくてはいけないと思います。</p> <p>そういう観点から言うと辛口になってしまうかと思いますが、1つは、基本的に学校図書館というのは、もしアクティブラーニングに対応するような学校図書館にしたい場合は中学校だと15,000冊、大きさと200平米くらいが必要です。小学校だとやはり5,000冊では到底基準には達してなく、10,000冊は最低ないとアクティブラーニングに対応できる図書館ではない。スペース的には少なくとも2教室分(60~120平米)は必要です。アクティブラーニングへの対応とは3つの学習形態への対応であり、個人学習、協働学習、一斉学習となります。この3つに対応できる図書館ではないとうまくいきません。そうすると、1クラスが一斉学習、協働学習、個人学習を並行してできるようなスペースとは、今言ったような教室の数を最低確保しないときちんとした学習の場とは言えません。</p>
高橋	<p>学校図書館部分と開放型部分を併せて2.5としてイメージがあります。蔵書については学校図書館部分にそれぞれ約10,000冊はあります。開放部分に5,000冊を置くイメージです。ただ、5,000冊を開放型部分に置いてしまうと、部屋がほぼ書架で埋まってしまうだろうと思っています。先ほど子育て支援について申し上げましたが、本を寛いで読んでいただける環境となると5,000冊まで置けず、スペースを重視して自由空間を増やして3,000冊にすることも必要とも思っています。トータルは10,000冊+開放型の部分の冊数となります。開放型と学校図書館を併せて2.5の区分となります。</p>
平久江	<p>そういったところで、都市部としての地方開放型の機能について考えなければいけません。A市は70年代から地域開放型図書館を行っています。この市は、1つの建物に公共図書館サービスに重点を置いた開放図書室と学校図書館があり、あまり交流がありません。蔵書の選択策についても交流がありません。地域開放型学校図書館は果たして本を揃える必要があるのか、あるいは情報提供に重点を置いたような形も地域開放型学校図書館にもあるのではないかと、思います。東京ならではの公共図書館サービス、東京ならではの地域開放型学校図書館を取捨選択していかないと同じ様になってしまう。そこを危惧しています。</p>

高橋	大串先生から開放型図書館で地域の活動の様子が出てきましたが、図書を中心として情報を得られる場所とのことでした。その情報の出し方というのは、特色づけと密接に関係するでしょうし、そこにどう工夫できるか、この限られた空間で如何に価値を生むか、ということに繋がって行くのではないかと捉えています。
平久江	学校図書館アドバイザーを置くことは非常に素晴らしいと思います。そこを中心に機能を充実させていく形でよいと思います。人の配置が手厚いところは素晴らしいです。
宇陀	仕切りがとても気に入っています。授業時間中は仕切りが閉じていて、終わったら開くということを開放型と言ってよいのでしょうか。図面を見る前の僕の勝手なイメージとしては、子ども達が図書館に最初に接することを考えた時に、人によるとと思いますが、最初の図書館体験は学校図書館なのか公共図書館のどちらなのだろうか、ということです。開放型学校図書館のよいところは、公共図書館と学校図書館の両方のイメージを持った新しい図書館体験ができるのではないかと、それは非常に面白いと思いました。コンセプトは勢いがあるのですが、仕切りを設置することで守りに入っていると思います。安全面を配慮して仕切りがあることは理解できるのですが、これは本当に開放型なのか気に入っています。その辺、平久江先生はどうお考えですか。
平久江	そこで難しいことは安全性です。そこでちょっとした問題が起こってしまうと全国ニュースになってしまいます。しかし、それを防ぐために固い扉を設置することは開放型ではダメです。
宇陀	区切り、仕切りの運用がポイントとなるのでしょうか。
平久江	とても難しい話だと思います。例えば曜日を変えて開放することもあり得ますし、安全面は物凄く大きなポイントとなります。
宮崎	小学校長が1番その問題を気にしています。トイレに関しても、学校の普通のトイレは使わずに地域開放型学校図書館にトイレを置いて欲しい、と要望が出ています。
高橋	学校側だけではなく、この新しい建物、校舎を造る時に地域説明会をやりませんが、地域の方々もこのセキュリティは大丈夫なのか、と真っ先に聞いてくる。様々な事件があつて神経質になっていて、安全性はしっかり抑えろよ、と1番関心事として出てきます。「その上で安全性が確保されているのであれば、そこに建ててもよい。できれば交流をうまく図りたい」といったような発想の順番となります。
宇陀	セキュリティを確保する上で、いかに交流を図るかの1つのアイデアとしては仕切り方式として出てくるのですね。
高橋	可動式間仕切りと言うものです。ない方が児童と一般の方の触れ合いができる

	と思う反面、今の求められるセキュリティという妥協点があります。
宮崎	危惧されていることの1つとして、子育て支援で小さな子が来ることを想定した時に、仕切りがあっても騒音は大丈夫なのかということです。学校の先生は図書館を静かに使わせることを前提としているのです。
宇陀	仕切りはやめたいですね。その場合は他のアイデアを出さないといけませんね。
高橋	教育委員の先生の中にも「仕切りはどのようなのでしょうか」とご意見はあります。ただ、現状はセキュリティを確保した上でnおよりよいアイデアが出てこないのです。こうせざるを得ないということです。
宮崎	(学校の先生から)「様々なことを限定してしまって小さい所に小さいスペースを作っても誰も来ないのではないか」と言われました。
大串	北海道は地域によりますが、学校の中に開放型図書館がありました。入口から歩いて行っても大丈夫なのか、校長先生に聞いたところ「この地域は3,000人しか住人がいなくて、みんな顔が分かっているから大丈夫です」と言われました。そういうレベルとは違いますよね。世田谷区での検討会では、やはり間仕切りを設けざるを得ない話がありました。首都圏のとある市に、公共図書館と子育て支援の施設のフロアが併設されている施設があります。小さな子どもを連れた親子、お母さん方は絶対公共図書館には来ませんでした。そういった事例が何か所もありました。なぜかと言うと、公共図書館のつくりとして、入口に新聞・雑誌が置いてあるからです。そこにおじさん、おばさん方が座っていらっしゃります。それだけで、もう親子連れやお母さん方は来ないのです。入口からカウンター奥に児童室があるのですが、誰も行かないのです。都市部は綺麗ごとを言っていたら話しにならないのです。
高橋	狭い中で子育て世代に来てもらうと言ったときに、今仰っていただいた方々がいるような空間だとイメージされた場合、2度と来ないと思うので、子育て支援にターゲットを絞り込んで、そういう方が来る方がよいのではないかと今イメージをしています。オールラウンドでやると、なかなか難しいかもしれません。
宇陀	壁や仕切りではなく超大型ディスプレイにしませんか。 インターネット、Webでそういった実験や研究を行っている所があるのですが、遠隔オフィスといって東京と大阪のオフィスを一体化のように扱って壁を全てディスプレイとしています。今のディスプレイは解像度が高く、一体であるかのように見え、それを通してお話もできます。
高橋	どこか企業が実験としてタイアップしてくれないでしょうか。
宇陀	やるならば、プロジェクターでもできます。プロジェクターに映像を映してお互いに接続すれば可能です。壁というのが、いかにも遮断されていてお互いよい気分ではないと思います。せめて物理的には行けないけれども、お互いの様

	子が見えることが実現できれば一体型、連携型と言ってもよいと思います。
大串	土曜日、日曜日で学校が休みの時に学校開放している所もいくつかありますが、その際は学校図書館全体が開放されて、おじさん、子育て世代の方々も来られますし、ボランティアの方に様々なことをお世話していただいて、絵本の読み聞かせを行っている所もあります。そういった意味では、土日は学校開放して、地域の方々に来ていただいて活用していただくのもよいのではないかと僕は思います。
高橋	平日もどうにかならないかと考えるところなのですが、先生が仰っているように、学校が終わった後は活用が可能であると思います。やはり日中が子育て世代の活動時間であり、その時間を考えないことはもったいないと思っております。
大串	理論的に言うと、子育て世代が読書施設に行ける距離というのは大体 200m～300mになります。ある市が調査をして、そういった所に施設をつくるということが子育て世代の方々からの、本に親しむ環境を地域に植え付ける 1 つの重要な施策であると打ち出したところもあります。そういった意味ではここ（開放型学校図書館）が午前中からスペースが使えて、絵本等様々なものが置いてあり、子ども達を連れてお母さん方が来てお話をしながら子ども達に読み聞かせができるので、これからの中野区に必要なことであると思います。ある程度スペースを確保できるのであれば、本の数は少なくともよいので、そういうようなスペースにして高齢者はなしにさせていただいて、メンターゲットを子育て世代にさせていただき、小さな子供の時から本に親しむ環境を地域の中でつくることをポイントに置いた方が僕はよいと思います。
平久江	学校の方の地域開放のイメージというのは、ボランティアの活用なのです。子育て支援とは差がある認識でなくてはなりません。そこが狙えていないと感じます。例えば子育て支援とボランティアが結びつけられる場所や形態を含めて完成させる際、何かしら知恵を出さないと学校の方では割を食ったというイメージを持ってしまうのではないかと危惧しています。学校としては、地域開放はボランティアの活用という意識が強いと言うことは現実面としては押さえておいた方がよいと思います。
永田	結局、学校図書館を運営するにも地域開放型学校図書館を運営するにもマンパワーの問題が 1 番大きいということです。それを税金で賄うということも難しい話です。ボランティアもどのように要請するか、ボランティアの人達が学校図書館に協力し、あるいは別のタイプの人かもしれませんが、地域開放型学校図書館の運営にどのように貢献して下さるか、ということです。 先ほど高橋さんが仰っていたように、ここで誰も来ないかもしれない。子育て世代の人達は近所の仲間が来れば集まるかもしれないけれども、子育て世代の

	<p>人達の仲間をつくる、積極的に繋いであげる、またプログラムを企画する、そういうマンパワーがどうしても必要になってきます。私はそのように理解しておりますが、そういうことを仰っているのでしょうか、そういう風に理解してよろしいでしょうか。</p>
平久江	<p>学校図書館コーディネーターというのを活用して、例えばボランティアに読み聞かせをしてもらい、そこに知を授けてくれる人（学校図書館アドバイザー）が人を惹きつけて、子育て世代のお母さんとボランティアをマッチングさせて、人と人を結びつけるような形で運営していけば、幾らか人は来ます。あとはボランティアの人によって集客力は変わって来るかと思えます。中野区辺りでしたら、そう言った方達は沢山いらっしゃるのではないのでしょうか。</p>
梶川	<p>塩尻の読書アドバイザーは、16グループの読み聞かせ団体の方が読書推進アドバイザーという形で各学校へ行ってコーディネーターとして活躍しているということでした。安城市では、退職した小学校の校長先生の中で図書館に理解のある方がアドバイザーとして動いていらっしゃいます。</p> <p>子育て中の親子を主な対象とすると仰っていましたが、ボランティア活動に積極的に参加する高齢者の方も多いです。そういった方は、毎朝図書館のドアを開けると新聞を広げて一日図書館に居る方とは違うと思うのですが、そういった方々が子育て支援に関わっていただきたいと考えます。</p> <p>また、学校のPTAの方々、保護者の方々も地域開放の方でボランティア活動等をしていただくと学校と地域の方々の結びつきができ、顔が見える間柄になり活動の場になるのではないかと考えてはいます。</p>
大串	<p>それだと乳幼児のサービスもいくらか変えて行かないといけません。オランダでは推奨している事例で、図書館に関わる50歳台以上の方々には必ず図書館でボランティアになる養成講座を受けていただき、積極的に地域のボランティアになっていただいている。それだけではなくて、例えば行政の方々が退職前教育に必ずボランティアになるような読み聞かせの講習を受けるようにすると、気風は出てくると思います。地域の図書館がそういった講座を積極的にやることは大切なことだと思います。茨城県の県立図書館は企業からお金を貰って、ボランティア養成講座を全県的に行っています。それも初級、中級、上級と3つのランクに分けて行っています。茨城の場合は県立図書館の図書館長が最初始めました。彼は企業周りをして資金を貯め、簡単に言うと10万円あると5講座ぐらいは作れるのですが、それを館の講座にしてしまおうという大胆な発想で行いました。茨城の場合は子育て関係の企業から資金を調達し、県立図書館が中心となって音頭をとりました。中野区の場合は中央図書館の館長さん、教育委員会の方がそういったことをおやりになられると中野内でも積極的に関わっていただける企業が出てくるかもしれません。</p>

子育て支援については「子育て支援サービスに関して、少しコメント」という資料をご参照下さい。

子育て支援についての企画書は全体的に良く書かれていて実践できればとてもよいと思います。この中で少し足りないことが幾つかあるので、3枚目の「補足する点としては」で記載しているのですが、1つは地域の図書館として保護者あるいは家族に対する乳幼児の読書の重要性に対する理解の促進、これが図書館の役割としてあります。例えば愛媛県立図書館はヨーロッパの取組みから学び、教育関係者だけではなく医者や心理学者を呼んで、子どもの時からの読書の重要性について話しをしていただく活動をされています。これも重要なことです。乳幼児に関わる方々からの様々なご意見をいただいて理論的に高めて行くことが必要となります。

それから、2つ目に小学生・中学生に対しては、本の紹介などで物語だけではなく、多様な内容の本を紹介していく必要があります。そこで（資料に）文化審議会からの意見を少し入れておきました。読み聞かせの目的は日本とヨーロッパで異なること。日本の子ども達の読書と読解力の関係についてPISAで調べているものがあります。第1回では、本を読む時間と学力（総合読解力）との関係を調べています。日本は諸外国と同じように、長く読む生徒の学力は低下する傾向にあります。フィンランドは右上がりとなっています。フィンランドは学校図書館を持っていないのですが、小学校に各教科べつに部屋があり、そこに本が置いてあって、その中で教育をしています。各教科別に本を読むということを勧めているので、フィンランドは右上がりの傾向が出ています。公共図書館としても単に本を楽しく読むだけではなく、積極的に知識の本を読んでいただく。読み聞かせの中でも、単に物語だけではなく、積極的に様々な分野、つまり「調べる」に繋がるような知識の本の読み聞かせを行う。外国の場合は積極的に表現、発表をするための読み聞かせをするという試みがある。そういった点で、公共図書館では、きめの細かい読み聞かせと、読み聞かせの幅を広げて、知識や社会的な経験を含めた、多様な読み聞かせをして行くスキル、あるいは読書の本を紹介して行くスキルが必要だと思います。

子育て支援は図書館だけではなくて関係機関と連携していかなくはいけません。（ビジネス支援に関しても同じことです。）今回挙げられている中学校は他の子育て関係、教育センターは併設で入っているので、そこと連携すればよいと思います。ただ、ここは中野区の子育て支援の1つのモデルケースなので、図書館が子育てのための相談の時間をつくる、例えば土曜日の15時からと言ったようなことも必要であると思います。他の機関と連携して、案内をすることが必要です。そこに関しては考えて行かなくてはいけないと思い、メモ（「子育て支援サービスに関して、少しコメント」）を作りました。

	何か子育て支援に関してご意見はございますか。
平久江	前向きに子育てをしている人だけではなくて、虐待やネグレクトが社会的に問題となっているので、そういったことにも対応しますよ、と書き込むと大分受けが良くなると思います。そういったところは難しい話だとは思いますが、図書館が幾らかそういったことに貢献できるようになればよいと思います。
高橋	新図書館は総合子どもセンターという相談機関と併設ですので、不登校の関連で図書館を利用していただくとか、そういった要素はぜひ入れたいと思っています。
宇陀	大串先生のメモに追加をすると、インターネットの活用、インターネットの情報論理的なアドバイスとあるのですが、もう1つ切り込んで SNS リテラシーというのも入れ込まないとダメかと思います。我々が考えているパソコンを使う感覚と LINE, Twitter, Facebook を使う感覚とは違います。この先も新しい SNS が出てくる可能性もあります。そこに関してはジェネレーションで差が出てきていますが、皆さんがどこまで活用しているのかも分からず、そこまで踏み込めていないのです。実感として分からないので、そこを取り組むのはよいと思います。SNS リテラシーはあまりやっていないので。
大串	今年から使われている4年生の道徳の教科書のコラムに、SNS に対する注意が書いてあります。20 年位前、学生引率でボストンに行った時、図書館を見て回りましたが、地区館の児童室にもコンピューターが並んでいる。子どもでもコンピューターを扱えるようになっていて、そこにパンフレットが置いてあるので読んでみましたが、内容としては、しっかり子どもをコントロールできるように、親が理解を深めて、家庭の中でも図書館でも子どもにアドバイスができるようにする、ということが記載されていました。
宇陀	SNS を使っている学生は独特です。現実のコミュニケーションにとっても影響を及ぼしている。
高橋	宇陀先生が仰っているように、とても重要だと我々も捉えていて、ただ自分自身がどっぷり浸かっている訳ではないので、感覚的には分からないのです。そう意味ではツクリエさんがまさに得意分野でしょう。
今泉	年齢的に若い子達と使っているツールが異なるので、常に私たちも今の小中学生の SNS の使い方が理解できてはいません。逆転の発想ですが、子どもが大人に SNS のリテラシーを教える講座とか、そうすると自分達に欠けていることが分かってくる。そんな発想の転換は考えとして面白いかもしれません。
高橋	その点も重要なポイントなので、次の機会にお話を深めていただけるよう、ぜひお願いします。
大串	僕みたいに「調べる」方の人間からしますと、調べる学習を探求的な学習だと講演をされている鎌田先生のお話を伺うと、「調べる」ということは小学校3年

	<p>生位から探求的な学習が始まるのですが、「調べる」ということはその時に終わるのではなくて中学，高校，成人してそれぞれの段階で「調べる」ことを行わないとすぐ忘れてしまう。長い人生の中で最初に「調べる」ことを始めた小学生の時から繰り返し，繰り返し学んでもらわないといけない。学校図書館にしる，公共図書館に繰り返し，繰り返しそういった講座を開いていただく。「調べる」ということを学んでいただかないと，住民の一人ひとりが図書館を活用して「調べる」ことにはならないと思いました。ぜひその件に関しても含めて次回お話しいただけると有り難いです。</p> <p>本日はありがとうございました。</p>
佐伯	<p>最後に次回の日程についてご連絡させていただきます。次回は第 3 回となっております。もしご都合がつくようでしたら 8 月 23 日（木），時間帯は 15 時から 17 時でできればと思っております。</p> <p>皆さまお忙しいと思いますので，第 4 回の日程をご提示させていただければと思っております。9 月 11 日（火）はご都合よろしいでしょうか。時間帯も同じく 15 時～17 時で開催させていただければと思っております。</p> <p>どうもありがとうございました。</p>